

長畝ふるさと通信

【2017年3月号】

■ 3月末でもミゾレ、アラレ・・・



春の訪れを告げるはずのフキノトウはとっくに呆けてしまっているというのに、3月末になってもミゾレ、アラレが降っています。金北山はまだ残雪に覆われたまま、鉛色の空を背負って不機嫌そうにしています。それでも百姓たちはいつも通り、着々と春作業をこなしています。20日、26日は集落あげでの「江流」で、全排水路をきれいに泥上げしました。さすがに2週続けての作業は老体にはきつく、青年会の若人たちも夜、集まって酒を呑む元気も残っていなかったそうで・・・



種もみも4月からの播種に備えて、浸種を始めました。浸種は種もみを一齐に発芽させるために必要な水分を、吸収させる作業です。種もみは水分が13%以上になると吸収が盛んになり、細胞の分裂や伸長が始まるそうで

す。発芽に必要な積算温度は100度。佐渡ではまだ水温がかなり低いので、最低でも2週間は浸種を続けなければなりません。冷たい水でゆっくりと水を吸収させることで、発芽ムラを防ぎます。

■ 田んぼ作業も着々と進行しています



① トラクターで畦を塗ります。100mの畦1本に要する時間は約20分。組合の田んぼは大小合わせて500枚もありますから、トラクター2台投入しても1か月以上かかってしまいます。

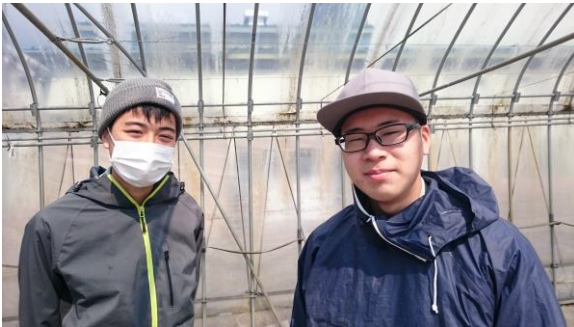


② 畦塗を終えた田んぼに水を張ります。この時期は風が強いので、せっかく塗った畦を放置しておくとも畦が乾いてポロポロに崩れてしまうので、水を張って表面を保護します。



③ 田んぼに水が溜まったら、トラクターのロータリーを使って土を細かく粉碎しながら、田面を平らにしています。30aの田んぼ1枚を仕上げるのに要する時間は約1.5時間。4台のトラクターが毎日フル稼働して、田植えまでに備えます。1日ごとに田んぼの風景が変化していくにつれ、春がやって来ます。

■ 神奈川県立平塚農業高校からインターンシップ受け入れ



3月25日から30日まで、神奈川県立平塚農業高校の学生2名をインターンシップで受け入れました。東京で開催された「新農業人フェア」でたまたま訪れた佐渡のブースに興味を持ち、今回、応募してくれたそうです。都会っ子たちに佐渡はどう映ったのでしょうか。田舎の田園風景やトキ放鳥の里山へ連れていくと

「すげ〜」の連呼。小倉の「千枚田」では、なぜこんな悪条件の場所で田んぼをつくったのか、その歴史的な背景を感じてもらおうとしましたが、「陽当たりがいいからですか？」との答えに少々戸惑うおじさんでした。日本人の主食であるコメの生産者の現実やこれからの課題、そして食糧について考えるきっかけになればいいなと思っています。棚田のてっぺんまで登って見た風景は彼らに何を問いかけたのでしょうか？

農業にかかわる人生を選択してもらいたいと心から願うばかりです。

